

Higashiyama Youth 東山センターを利用している青少年にインタビュー

今回お話を伺ったのは、陶工の松尾亮佑さん。創造工作室で陶芸の活動をされています。

——活動を始めたきっかけを教えてください。

大学生の頃から器を集めたり見に行くのがすごく好きで、その当時は器だけでなく、革やガラスなどの工芸、アートを、いろんなイベントやギャラリーに見に行きました。人がものを作ることに興味があって、そのうち自分でも作りたいなと思うようになってきたある時、センターの近くにある陶磁器会館に行くと個展をされている作家さんがいて、その作家さんに「良かったら教えてもらえませんか」と直談判しました。快く引き受けてくださり、教えていただけることになったことが始まりですね。

それから一年ほど、月に二回ほどマンツーマンで教えていただいたのですが、その作家さんが借りている窯から出て行かれることになり、どうしようかと思っていた時に、また陶磁器会館で出会った方に同じようにお願いしたところ、教える代わりに、仕事も手伝ってほしいということで、開いている一般向けの陶芸教室で教えてもらいながら、その方の窯元で活動する作家さんの手伝いをしつつ、一年間学びました。僕が教わったところは禎山窯という窯元なのですが、一年たった時に、禎山窯のオーナーさんに「これぐらいロクロができるんだったら、作家になったらどうか」と言っていました。その時は、作家って大それているなと思いましたが、好きな時間に好きなだけ自分のペースで作陶できると聞いたので、お願いしようかなという気持ちで始めました。それから、ただ陶芸を学ぶ、楽しくやるだけじゃなくて、売ってみたいとか、仕事にしたいとか、人に対して発表したいという気持ちが出てきて、イベントに出展しました。買ってもらったときに、自分の作ったものが評価されたという実感を持つことができ、作家というものをやってみたいと思うようになりました。その後も一年くらい教えてもらって、どんどん腕が上がってきて、できることも増え、師匠の仕事も任せてもらえるようになってきました。陶芸は、他の工芸に比べて、工程がめちゃくちゃ多くて、一つの作品ができるまで最低一か月半はかかるんです。だから一人前になるまでものすごい時間がかかると言われています。1〜2年くらい教えてもらって、やっと一人でできるようになった時に、いろんなところに出していこうと思い、京都の大きなイベントに師匠と一緒に出ました。それに出展してから、作家としてやるんだったら、学校に行った方がよいかとか悩みましたが、師匠にも「そこまでできるなら学校は行かなくてもいいのでは」と言ってもらって、そのまま陶芸作家として活動することにしました。

——学生時代に陶芸を勉強されていたのですか？

いいえ。心理学を専攻し、いわゆる心理カウンセラーを目指す大学・大学院を卒業しました。心理系の仕事を大学院の頃から7年ほど続けつつ、自分がなりたいと思う目標が出来た時

「なんか違うなと思い」将来のことに悩んでいました。陶芸作家としてやっていきたいと思い、陶芸家の方に話を聞きに行くと、まず「やめとけ、食えない」と言われるんです。そもそも技術を身に付けるのに時間がかかるし、作ったとしても売れるか分からない。やっぱり厳しい業界だから、心理の仕事した方が安泰だよ、とも言われます。

——今もまだ迷っていますか？

いや、もう今は決めました。色々な陶芸家の人から話を聞くことで、覚悟を決めるには現実を見ないといけないから、どういう業界でどういう風に生きていくかという、生き方を決めるきっかけになりました。周りの後押しもあり、未来は分からないですけど、作家活動でなんとなく生きていけるんじゃないか、生きていきたいなと思える瞬間があったんですね。親からも反対されたけど、その親でさえ折れてくれて、「これは今、この大きな流れに乗っていて、自分はこの道に進むのが合っている」と思うようになりました。また、働き方を考えるとやはり特殊で、上の意向に従って働く会社のサラリーマンとは違って、個人事業主は一人一人が自分で自分の面倒を見るという形なので、グループ展などの時に、その人たちが集まって仕事をすると、命令や指示で動いているわけではないので、単純に純粋に「面白い」という感じで話ができるんです。あと、あんまり気を使わなくていいので、心が軽いなと思います。そういう意味でも自分はこの業界に向いているなと思ったことも、作家として生きていこうと決めた理由の一つです。

——今後の展望や作風に関して思っていることはありますか？

それについては、今すごく悩んでいるところです。僕が世に出すことを選んだ最初の器を、ギャラリーなどに作品を持っていったある時、「白い器は色んな人に使いやすいし、馴染みやすいけど、他の人にも作れそうだよな」と言われたことがあって。師匠からは「そういうことは絶対言われるから、何を言われても自分の作品が一番だっていう気持ちは持つておきなさい」と言われていたので心づもりはしていたのに、いざ言われると、自分が足りない部分を自覚しているだけに、とてもショックを受けてしまいました。やっとなねり出して作ったものだったので「これじゃダメなのか」と思い、もう何を作ったらいいか分からなくなって、ロクロに向き合えなかった時期がありました。それでも、色々なイベントに参加しなくてはならなくて…。そんな中、あるイベントで一緒に出展した作家さんにすごく刺激を受けました。その方は年齢も近く、売れ筋の方で、仕事している姿がすごくカッコよかったんです。それを見て、つくったものを並べるだけじゃダメだ、観に来る人はどういうものか知りたいという人もいて、話をしなきゃと思って心が動いて、その日は過去で一番売れました。とても嬉しかったですね。それから、色味や形をどういう風にやってみようか実験しながら、自分の好きなものを出していこう、それが受け入れられるかは分からないけど、まずは出してみようと思っています。計算してできあがるものと、やってみてできあがるものがあるって、

僕は前者ばかりやっていたけど、なんとなくやってみて出来たものも面白いというのが、陶芸をやっていて感動する瞬間の一つで、それを大事にしたいなというのが今思うことです。別に狙わなくていいし、自分のものをつくろう、というのが今後の展望です。

——陶芸には工程がたくさんあるということですが、一番楽しい工程、大変な工程はありますか？

陶芸の流れは大まかに言うと、形を作る段階の「成形」、形を整える段階の「削り」、焼成段階の「素焼き」をした後、釉薬をかける「釉掛け」があり、「本焼き」をして完成です。その中で好きと言えば、一番は成形ですね。はじめのつくる工程で「よっしゃ、これ綺麗につくれた！」という時があります。仮にうまくいかなかったとしても「ここをこうしたら良かったかな」とか、むしろ失敗したことで「これはこれでいいな」と思える瞬間が多いのが、成形ですね。一番好きじゃないのは、釉掛けかな。釉薬は、もともとガラス質になる金属の粉や石の粉、植物の灰などが混ざり合ったもので、それを水で溶いて、素焼きした生地に吸い付けるイメージです。釉薬かけるにも方法もたくさんあるのですが、僕の場合は、釉薬の入ったバケツの中に作品を入れてつける「どぶ付け」という方法で、150個とか数が多いと、流れ作業の工場みたいで（笑）。それだけでは終わらなくて、だまになっていたり、一部だけ厚くなっていたりするムラなどを一つ一つ手直ししないといけません。釉薬の濃度調整や、管理も大変で、面白いけど、けっこう手間がかかりますね。作品の風合いを決める最後の工程でもあるので、ここで手を抜くと今までの作業が水の泡になると思うと、真剣にやらないと！となります。あとはまあ、最後の窯出しの時も楽しいですよ。焼いている途中は見れませんし、開けるまで分からないですからね。

——松尾さんと、青少年活動センターの関わりを教えてください。

過去に1回使わせてもらったことがあって、ただその時は、焼成窯を使いたかったのですが、ちょうど故障で使えなくて…。窯が直ってからまた使おうと思ったまま、そのうち自分で窯を持つようになったので、しばらく来ていませんでした。最近になって、続けている心理の仕事の職場の上司や同僚が、僕がこんなに陶芸をするようになってきたので、その作品を見て、陶芸をやってみたいから教えてほしいと言ってくれました。参加者は3人いて、教える場所を考えていた時に、たまたまセンターを思い出して、「ロクロ3台あるやん！一気に教えられるわ！」と。久しぶりに見学しに来てみたら、焼成窯も復活していて「うお〜！」と思ったんですね（笑）。ロクロは出来るし、最低限必要な道具はほとんど揃っていて、こんなにありがたいことはないと思いました。定期的に使うことができることや、30歳までだったらロビーで作品展示ができる制度もあると教えてもらって、ぜひ30歳までにここで個

展をやってみたいなと思いました。東山は陶芸が盛んなところだということもあって、こんな施設があるんだというのは、すごくありがたく感じました。

—センターでの個展が実現できるといいですね。最後に告知をどうぞ。

3月に京都文化博物館で開催する「京都アートクラフトマーケット」というイベントに出ます。京都市内でも大きなイベントなので、ぜひ見に来てもらえると嬉しいです。

—ありがとうございました。

【告知】

京都アートクラフトマーケット

3/19（土）～21（月・祝） 11：00～17：30（21日のみ17：00まで）

場所：京都文化博物館